

福井県英語研究会の次のステップ

福井県英語研究会会長

田 中 宏 明

新学習指導要領と小・中・高連携について

本年度ほど英語教育が連日報道されたことはなかったと思います。4技能を評価する民間検定試験を大学入学共通テストへ導入することの賛否については、その制度化が話題になった当初からさまざまな熱い議論が展開されてきましたが、基本的な方針が撤回されることはありませんでした。ところが、受験に必要な共通IDの発行当日である11月1日の朝になって、突然その延期が決まりました。全国の高等学校は、唐突な報道にたいへん戸惑いました。それまで、2年生の生徒や保護者を対象に、民間検定試験を活用する英語成績提供システムや6団体が行う検定試験の出題形式や特徴等の違いなどについて説明し、苦勞して準備を進めてきたからです。さらに、共通テストが始まる2020年度の入試において、受験生が独自に受けた民間試験の成績を2次試験の合否判定や出願資格にどのように活用するかは大学によって異なり、簡明でないことも受験生や保護者、さらに教員を不安にさせています。

そのような混沌とした大学入試状況の一方で、グローバル化に対応した英語教育改革が進められ、令和2年度からは、小学校の学習指導要領が改訂され、英語科が教科になります。福井県は先行して英語教育を推進してきましたが、小学校3・4年生で週1コマ年間35コマの外国語活動を行い、5・6年生で週2コマ年間70コマの英語を教科として行うこととなります。さらに、これまで単語数については指定されていませんでしたが、600～700語程度は大きな変革です。

令和3年度からは、中学校の学習指導要領が改訂され、学ぶ単語数は現行の1200語程度から1600～1800語程度に増えます。これまでは中学校を卒業するまでに1200語程度を学んでいましたが、改訂後は2200～2500語程度、つまり2倍以上の単語を学ぶこととなります。さらに、文法面においても、現行では高等学校の学習内容になっている「原形不定詞」「現在完了進行形」「仮定法」などは、中学校で学習することとなります。

令和4年度からは、高等学校の学習指導要領が改訂され、「コミュニケーション英語」に代わって新設される「英語コミュニケーション」において、これまで変更されることがなかった4技能の区分に見直しが入り、「話す」というアウトプットが細分化・強化される形に改められたという点は、指導に当たって留意すべき点でしょう。また、「英語表現」に代わって、新設される「論理・表現」では、アウトプットを強化することを目標としていますが、自分の考えや気持ちを適切な理由や根拠とともに論理的に伝え合える能力の向上が求められます。

このように大きな英語教育改革が進められる中で、私たち英語教師が最も気をつけるべきことは英語教育の系統性だと思います。自分たちが教えている子どもたちは、これまでどのような授業で英語を学び、どのように評価され、自分たちが教えた子どもたちが、将来どのように



英語を学んでいくのかということを理解した上で、子どもたちがスムーズにスキルを上げていけるように考えながら指導していくことが求められます。そのような点で、今こそ、校種を超えて、お互いの授業を見せ合い、協議する機会を多く持ち、研究を積み重ねながら、それぞれの指導改善を推進していくことが、福井県全体の英語教育力を高めることに資すると思います。

英語ディベート委員会の創設について

昨年度12月に、第13回全国高校生英語ディベート大会を福井県で開催しましたが、そこで確立した全県的なディベート指導体制、教員のネットワークを受け継ぎ、発展させていくことを目的に、研究部の中に英語ディベート委員会を創設しました。本年度は、福井県英語ディベート大会（準備型・即興型）とそれらの大会に向けた研修会の開催、さらにディベートの指導法に関する研究や委員会内外の教員との情報共有を行いました。

本年度、ディベート委員会を組織化したことにより、計画的で継続的なディベート指導ができるようになったことや中高の英語教員が協力して活動することを可能にしたことに加えて、次期学習指導要領から設定される科目「論理・表現」の指導法についても、研究を深めることができました。

また、英語研究会シルバー会顧問の岩崎達雄先生から、福井県の英語ディベート力向上のために役立てて欲しいと昨年度末に貴重なご厚志を賜りました。先生のご意向に沿って、高校生英語ディベート大会の準備型と即興型、それぞれの優勝校に贈呈する「岩崎達雄杯」を創設しました。11月の大会で贈呈するに当たり、岩崎達雄先生が福井県の英語教育を高めてこられたご功績と本県出身でノーベル物理学賞を受賞された南部陽一郎先生と福井中学校で同級生であったことを生徒に伝えると一様に感嘆していました。

英語研究会の組織強化について

10月29日、坂井市立三国中学校で開催された英語教育研究大会では、研究テーマ「自分の考えや気持ちを伝え合う生徒の育成」のもと、園井圭介教諭がペアでプレゼンテーションを行う2年生の授業を公開しました。坂井地区で作成したCAN-DOリストをもとに、英語を使って何ができるようになり、それを実際のコミュニケーションでどう使うかという観点から授業改善を推進している坂井地区の先生方の熱心な取組みも紹介されました。

その1週間後、全英連三重大会では、小・中・高の授業実演を参観しました。「校種間の学びの系統性を意識した英語教育」のテーマのとおり、高校の授業実演では、ディスカッションを通して英語で意見を伝え合い、グループの意見をまとめる活動が公開されました。中学校では、物語を読んで感じたことを自分の経験と関連付けながら伝え合う活動が行われました。特に感銘を受けたのは小学校の授業実演で、東京オリンピック・パラリンピックで自分が観たい競技とその理由を伝え合う活動が公開されました。お互いの発表を聞き、工夫しているところ



や改善点について発表する場面で、論理の組み立て方を指摘する意見がありました。小学校の英語の授業において、自分の考えや意見を工夫して効果的に伝え合う活動をする中で、このような意見を児童が発表するのを聞いて、今後の中学校、さらに高校の授業のあり方を検討しなければならないと再認識しました。

福井県英語研究会は、その会則の第二章において、本会は県中学校および高等学校英語教育の進展と研究活動の促進を図ることを目的とし、第三章において、本会の会員は本県中学校および高等学校の英語科教員と定められています。

小学校において、英語科が教科化され、小・中・高の連携がますます重視される中で、会員の皆様からご意見をいただきながら、本会の組織の在り方を再考して、強化していく必要があると考えています。よろしくお願いたします。